

2022年11月6日主日礼拝

説教題「私たちの『矢印』はどこに？」出エジプト記 19章1～6節

主任牧師 加藤 誠

「あなたたちは、わたしにとって、祭司の王国、聖なる国民となる」(出エジプト記19章6節)。

大谷レニー先生の足跡と働きを覚えながら、この一か月間、先生を送ってくださった主なる神に感謝と賛美をささげる礼拝を共にできたことを感謝しています。使徒パウロがコリント教会に宛てた手紙で「わたしは他のすべての使徒よりもずっと多く働きました。しかし、働いたのは実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです」と書いたように、キリスト者はどんな場合にも、個人ではなく、神さまの恵みをたたえます。このたびもレニー先生個人をほめたたえるのではなく、レニー先生を通して働かれた神の恵みに目を注いで「神賛美」を共にささげる礼拝としたい。プロジェクトチームの祈りはそこにありました。丁寧な準備を積み重ねてよきチームワークで働きを担ってくださったプロジェクトチーム、さまざまな見えないところでの奉仕を担ってくださったお一人お一人に感謝します。

レニー先生は「矢印の人」でした。レニー先生はいつも、私たちの間で神の愛と恵みを指し示されました。先生の思い出を語る方たちの多くが先生のことを「厳しい方」だったと表現していましたが、しかしそこには主なる神と教会に対する真剣さと、一人ひとりへの愛が深く込められていることをみんなが感じていましたから、レニー先生を通して、そこにはいつも「矢印」がくっきりと浮かび上がっていたように思います。その意味で、わたしはレニー先生を思い起こしながら、わたし自身の「矢印」は、また教会の「矢印」はどこに向いているだろうか。その「矢印」を他の人にも伝えることができているだろうかと問われる思いがしています。皆さんはいかがでしょう。

さて、出エジプト記を読み続けています。今朝の19章は、荒れ野を旅してきたイスラエルの人たちがいよいよ「十戒」を受けるシナイ山のふもとに到着した場面です。そこで主なる神はモーセを通してこのように語り掛けます。「あなたたちは、すべての民の間であって、わたしの宝となる」(5節)、「あなたたちは、わたしにとって、祭司の王国、聖なる国民となる」(6節)と。

今朝は二つの言葉に注目したいと思います。まず「わたしの宝」という表現です。申命記7：6以下に「神の宝の民」としてこんなふうにかかれてあります。「あなたの神、主はすべての民の中からあなたを選び、ご自分の宝の民とされた。主があなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。ただあなたに対する主の愛のゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王から救い出されたのだ」と。イスラエルの人々が強くて、信仰心熱く、頼もしい民だから「わたしの宝

の民だ」と呼びかけられているのではないのです。「どの民よりも貧弱だったから」、主なる神は彼らに心を寄せてエジプトから救い出し、荒れ野の旅を共にしているというのです。主なる神が「わたしの宝」という時、私たちの行動や結果の前に、主なる神の側の決断、一緒に歩む覚悟が示されていることを覚えてほしいのです。新約聖書のザアカイがそうでした。主イエスはザアカイが立派な信仰の持ち主だったから彼の家に泊まったのではありません。ザアカイの評判は良くなかった。しかし「彼もアブラハムの子だから」という理由で、主イエスはザアカイの友となられたのでした。「わたしにとってあなたは大切な友だ」と言い抜いてくださった。その主イエスの愛に触れたとき、ザアカイの中に神への応答が生まれたのです。

二つ目に「祭司の王国」という言葉です。この直後の20章でイスラエルの民は「十戒」を受けるのですが、そのあとにも戒めが長々と続いて語られていきます。それらは簡単に言うと、荒れ野の旅において日々忘れずにささげるべき「礼拝」についての指示です。そして礼拝を導く「祭司」の役割についても丁寧に語られています。「祭司」の働きとは何か。朝に夕に祭壇にともし火を忘れずに灯し、犠牲をささげて煙を天に向かって昇らせることです。つまり毎朝、毎夕、一緒に旅をしている人々を覚えて執り成し、祈りと賛美を天に向けてささげること。言い換えれば、この世界の中で、どんな時も、神さまの思いが分からず理解できない時も、祈り続けること。それが祭司に託された働きなのです。

その場合、祭司に求められる要件は何かというと「自分も罪人の一人である」という自覚です。「自分は他の連中とは違う。清い人間だ」などということはない。祭司も自分のために贖罪のささげものをしなければならない罪人の一人なのです。ですからイスラエルの民は、自分たちは他の民族よりも優秀で信仰深いから「祭司の王国」とされたなどという思い上がりを間違っても持つことはできません。自分たちは一番貧弱で、頼りないものでありながら、主なる神の憐みと恵みによって「祭司」という役割をいただいている。その主の深い憐れみと恵みを味わった者として、この世界で日々礼拝を日々大切にささげることが祭司に託された働きなのです。

新約聖書に生きる私たちにとって大切なこととしては、この出エジプト記で求められている礼拝の際の動物の犠牲は、新約聖書においては不要となったということです。イエス・キリストがただ一度、十字架の上で私たちの罪をすべて引き受けてくださったゆえに、私たちは礼拝のたびごとに動物を犠牲にしなくてよくなった。その意味で、キリストによって呼び出された教会の私たちも「イエス・キリストの恵みと赦しゆえに教会は、祭司の働きをさせていただいている。主イエスの執り成しがあって自分たちは立つことができている」という自覚において、この世界で毎朝、毎夕、世界を覚えて執り成し、祈りと賛美をささげる大切な役割を覚えて、自分たちの「矢印」をしっかりと主なる神に向けていきたいのです。